古事記（2）

つぎになりしかみのな　クニノトコタチノカミ
次成神名　国之常立神　訓常立亦如上（常立を訓じて亦上の如し）
つぎにトヨクモノカミ　このふたはしらのかみまたひとりがみになり
次豊雲野神　此二柱神亦独神成
ましてみをかくすなり
坐而隠身也
つぎになりしかみのな　ウヒヂニノカミ　つぎになりしはイモスヒヂ
次成神名　宇比地邇神　次妹須比智
ニノカミ　つぎにツノクヒノカミ　ついでいも
邇神　此二神名以音（この二神の名音を以てす）　次角杙神　次妹
イクグヒノカミ
活杙神　二柱（ふたはしら）
ついで　オホトノヂノカミ　つぎはオオトノベノカミ
次意富斗能地神　次妹大斗乃弁神
此二神名亦以音（この二神の名音を以てす）
つぎに　オモダルノカミ　ついでいも　アヤカシコネノカミ
次於母陀流神　次妹阿夜訶志古泥神
此二神名皆以音（この二神の名音を以てす）
つぎが　イザナキノカミ　つぎにいも　イザナミノカミ
次伊邪那岐神　次妹伊邪那美神　此二神名亦以音如上（この二神名亦音を以てすること上の如し）
かみのくだりクニノトトタチノカミよりしもイザナミよりまえを
上件自国之常立神以下伊邪那美以前
あはせてかみよななだいとよぶ
并称神世七代　上二柱独神各云一代次双十神各合二神云一代也（上の二柱は独り神にして各々一代という　次にたぐえる十神各合二神云一代也　とおの神は各々二柱の神を合わせて一代というなり）

別格の五柱の神が現れては消えた（土中に潜って根となった）あと、さらにつぎつぎと天つ国に神々が生まれて行く。それは、あたかも草木が実をつけて元の茎から離れて行くように、登場し、名を呼ばれ、入れ替わって行く。

こういう名前を羅列する語りは、古代の伝承形式の基本形、世界中の諸民族の説話伝説に見ることが出来る。

日本列島の古代伝承でも同じ語りをしていたことは大切にしたい。現代人の感覚からは無意味に思われるこの長々しい羅列がどんな重要な役割を果たしていたか、軽々しく判定しないほうがいいだろう。人びとはこの長々しい名前の羅列を楽しんだのだ（ここにも当時の人びとの美に対する欲望の動きが働いていることを受け止めておきたい）。それは、声を挙げて読み、それを聞くという動作の連鎖のなかで楽しまれた。この名前を読み上げる行為は古事記のなかでなんども繰り返される。そして、次第に歌謡に取って代られて行く。この移動は、人びとの関心が美から利へと変って行くのと応じ合っている。名前を読み上げることは声を聞くことであって音を聞くことではなかった。おそらくこの名前を読み挙げなら、その語り手（謡い）と聴き手は、ともに踊るような大きな身振りをし合っていただろう。

やがて「声」から「音」を聴き分ける習いが育って行く。（「声」は内から出、「音」は外から出す）。

古池やかはづ飛び込む水の音　芭蕉

草かすみ水に声なき日暮れ哉　蕪村

ここにあまつかみもろもろのみこともちてイザナキノミコトイザナミ
於是天神諸命以詔伊邪那岐命伊邪那
ノミコトふたはしらのかみにこのただよへるくにをおさめかためよと
美命二柱神修理固成是多陀用弭流之
あまのぬぼこをたまひてことよせたまひし ゆゑにふたはしらのかみ
国賜天沼矛而言依賜也　故二柱神
あまのうきはしにたたして
立（訓立云 多多志）（立を訓じて多多志という）天浮橋而
そのぬぼこをさしおろしもちて えがけば
指下其沼矛以画者
しお こをろこをろに かきなし
塩許袁呂許袁呂邇（此七字 以音）（この七字音を以てす）画鳴（訓鳴云 那志）
（鳴を訓じて那志という）
てひきあぐるとき そのほこさきよりしただれおつるしおのるいせき
而引上時自其矛先垂落塩之累積
しまとなる これ おのごろじま
成嶋　是淤能碁呂嶋（自淤以下四字以音）（淤より以下四字音を以てす）
そのしまにおりまして あまのみはしらをみたて やひろのでんを
於其嶋天降坐而見立天之御柱　見立八
みたてり ここにそのいもイザナミノミコトにとひていはくながみは
尋殿　於是問其妹伊邪那美命曰　汝身
いかになれるこたへていはくわがみはなりなりてなりあはざるところ
者如何成　答白吾身者成成不成合処
ひとところあり しかしてイザナキノミコトつげるにわがみはなり
一処在　爾伊邪那岐命詔　我身者成
なりてあまりしところひとところあり ゆゑにこのわがみのあまりし
成而成余処一処在　故以此我身成余
ところをもちて ながみのあはざるところにさしふさぎて
処　刺塞汝身不成合処而
もってくにうみをなさん うむこといかん
以為生成国土生奈何（訓生云宇牟下效此）（生を訓じて宇牟と云う下此に倣う）

伊邪那岐と伊邪那美の二神が生まれるまで、古事記では十六柱の神が先立ち、神世七代を経過している。日本書紀では、本編で十柱が先行し、やはり七代に分けられる。そうして七代目陽神（おがみ）と陰神（めがみ）が天つ国の神々の命を受けて、淤能碁呂嶋の創出を企てる。「天沼矛」は絵筆か鑿の喩である。それを持って天と多陀用弊流之国に架けた橋「浮橋」の上から島の図様を「画（えが）」いたのである。

伝統的に「画」は「かく＝掻く」の意味に解釈されてきたが、それでは太安万侶がわざわざわざ「画」の字を選んだ理由が汲めていない。ここは「描く」の「画」と読まねばならない。つぎの「画鳴」もわざわざ「かきなしと訓め」と注を入れている。「鳴す」は「成す」と同声だが、文字にすると「鳴」と「成」では意味が異なってくる。二神と塩がともに「許袁呂許袁呂邇」と絵を画き、鳥のように鳴き、歌い踊り（うたいおどりを書紀では「楽」の字を当てている）、島の形を成すということだろう。引き上げた矛先（筆先の喩）から滴り落ちた絵具というようすも、筆に含ませた絵具が図を画くさまを連想させる。あるいは鑿が土を彫り形を成すさまも連想させる。このくだりは、神々による芸能芸術の始まりのさまを提示しているのである。

「見立て」という語がここに出てくる。

「成成不成合」「成成而成余処」「刺塞汝身不成合処」のところ、性器と男女の性行為の謂、と解釈されているが、たしかに書紀には鶺鴒（せきれい）の仕草を真似たと誌す書も紹介されているが、言葉を綴っている人の念頭にあるのは、植物の、たとえば南瓜の交配のさまを彷彿させていることにも目を向けておきたい。この辺りの二神のやりとり、総じて芝居じみている。

と

イザナミノミコトこたへていはく　しかよけむ
伊邪那美命答曰然善
しかしてイザナキノミコトののたまうに　しからばあとなと
爾伊邪那岐命詔　然者吾与汝
このあまのみはしらをゆきめぐりあひて　みとのまぐあひを
行廻逢是天之御柱而為美斗能麻具波
このごとくめぐりてなさむと　すなはちのたまうに
比（此七字以音）（この七字音を以てす）如此之期　乃詔
なはみぎよりめぐりあへあはひだりよりめぐりあはむ　およそめぐり
汝者右廻逢　我者自左廻逢　約竟廻
おはりしとき　イザナミノミコト　さきに　あなによしえを
時　伊邪那美命先言阿那邇夜志愛袁
とこを　といひ　あとに　イザナキノミコト
登古袁（此十字以音下效此）（この十字音を以てす以下これに倣う）後伊邪那岐命
あなによしえをとを　といひ　おのおのこれをいひおはりし
言阿那邇夜志愛袁登売袁　各言竟之
のちそのいもにつげていうをみなのさきごとよからずと　しかれども
後告其妹曰　女人先言不良　雖然
くみどに　おこして　うみしこは
久美度邇（此四字以音）（この四字音を以てす）興而　生子
ひるこ　このことはあしぶねにいれてながしさりぬ
水蛭子　此子者入葦船而流去
つぎにうまれしはあはしま　これまたこのたぐひにいれず
次生淡嶋　是亦不入子之例

イザナミとイザナキの二神によるオノゴロ島作り、そして神殿の見立てが行われた。国生みの着手である。

二神の次の仕事は神生みである。そこで行われる「性」行為へ向かうやりとりは、人間らしさを欠く。見立てた神殿の柱を、女神は右廻り男神は左廻りして出会ったところで「ミトノマグアイ」をしようと約束して「クミドニオコシ」たら、子が生まれた。この過程に大きく欠けているのは、身籠るということへの関心である。二神による神神の生産も、植物の生成に見立てている。無文字文化時代、植物の生のあり方と動物人間のあり方を、文字文化時代の人間のように区別していなかったことに注目したい。これは『楚辞』などにも見受けられるから東アジアに根強い思考感性と言えよう。

最初の性行為見立てで生まれた子は、島としては不充分な出来栄えで、一番目は葦船に入れて流された。どこへ流されたのかは語っていない。二番目の子は「淡島」で子の数に数えないと語られる。ここは、通説は流産したように解釈されるが、「水蛭子」が「葦船」に入れられたという「見立て」は何を意味しているか、考え直す必要がある。

また、二神が柱を廻って出会った時に「アナニヨシエオトコヲ」「アナニヨシエオンナヲ」と言い交わす台詞のやり取りは、非常に芝居がかっている。ここには島を生むという行為が一つの神聖な国生み儀式として見ようとする意識が働いている。

「こをろこをろ」と歌い踊るのは、素朴な美の形。形式化しない「声」と「身ぶり」の段階。御柱と八尋殿の見立ては、美の術「見立て」の試みの段階。そして見立ての柱を廻り「アナニヨシ」と同じ型の台詞を言い合う段階に来て、先の美の術が形式化へと向かっていることが観察出来る。美の術すなわち芸術の誕生である。

と

ここにふたはしらはかりていふ　いまあがうみしこよからず　なお
於是二柱議云　今吾生之子不良猶
あまつかみのみもとにまうすべしと　すなはちともにまゐのぼり
宜白天神之御所即共参上
あまつかみのみことにこふ　しかしてあまつかみのみこともちて
請天神之命　爾天神之命以
ふとまにに　うらなひてのりたまふ
布斗麻邇爾（此五字以音）卜相而詔之
をみなのさきことよからずによるまたかへりくだりあらためていへと
因女先言而不良　亦還降改言
ゆゑにかへりくだりさらにそのあまのみはしらをさきのごとく
故爾反降　更往廻其天之御柱如先
めぐり　ここにイザナギノミコトさきにいふ　あなによし　えを
於是伊邪那岐命先言阿那邇夜志愛袁
とめを　あとにイモイザナミノミコトいふ　アナニヨ
登売袁　後妹伊邪那美命言阿那邇夜
シエヲトコヲ
志愛袁登古袁
このごとくいひおはりてみあはせうみしこは　アハジノホノサ
如此言竟而御合生子　淡道之穂之狭
ワケノシマ
別嶋（訓別云和気下效此）（別を訓じて和気と云う下これにならへ）
つぎにうまれしはイヨノフタナノシマ
次生伊予之二名嶋
このしまはみひとつにしてめんよっつあり　おもごとになあり
此嶋者身一而有面四　毎面有名
ゆゑにいよのくにはエヒメといふ
故伊予国謂愛比売（此三字以音下效此）（此三字音を以てす下こあれにならへ）
さぬきのくにはイヒヨリヒコ　あはのくにはオオゲツヒ
讃岐国謂飯依比古　粟国謂大宜都比
メといひ　タケヨリワケといふ
賣（此四字以音）土左国謂建依別…

歌や舞いや台詞が形式化されていく。
それは歌や踊りや台詞が共同性を獲得して行くということである。共同性というのは、個の活動が他者の活動と同じ共通の地盤の上にあり、境界線を共有していることを暗黙の裡に了解し、認め合っている関係にあるということである。その情況にあれば、個は孤立しなくて済むし、また、個の力を無限に拡大させてくれるように思える。共同性は二人の関係（男と女、男と男、人と人、人と神など）から無限多数（親子→家族→村→社会→郷→国 etc.）へと拡大する。その拡大を永続させたいという欲望は強く、それだけ個としての人間は弱いからだが、拡大域を守るために法を作り制度を作り、制度をより強固にしようと怠らなくなる。
このとき、最も有力な働きをするのは、文字になった言葉であり、形式化され定式となった言語である（声ではない）。
この共同性は、それを守ろうとする諸段階で、一つの定式（制度）を持ち、人をその内部に閉じ籠らせ安住させ、閉鎖していることを気づかせない。露伴はそれを「雲の影」と呼んだ。
美は共同性を保たなくて成立する（花は好例）。人間も、おそらく最初に発見した美は共同性を持っていなかっただろう（粥見井尻土偶）。しかし、それはすぐに共同性を要求する。人が要求するのである。共同性を保とうとするところに、美の術が登場する。美の術、すなわち芸術。芸術は共同性の上に成立する。共同性の自覚なしに成立し得ない。共同性の獲得には形式の定式化が必要である。
イザナミ、イザナキが二人で一つの瓊矛を持って歌い踊っていた時は、共同性を獲得していなかった。天の御柱を見立てたとき、形式への試みが始まる。

と